



# What ISIT?

ISIT:Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

## 「第1回福岡OSS研究会」開催

<平成18年12月19日>

ISITは福岡産学ジョイントプラザより産学研究育成支援事業を受託しております。このたびその一環として、産学連携のもと OSS(オープンソースソフトウェア)による産業振興を図るため、企業の技術者や大学の研究者、又 OSSに关心をお持ちの方々による情報交換、技術交流、マッチングの場として福岡 OSS 研究会を立ち上げ、平成18年12月19日に第1回目の研究会を開催しました。

講演の部では、独立行政法人情報処理推進機構(IPA)OSSセンター長 田代秀一氏、株式会社ネットワーク応用通信研究所(NaCl)代表取締役 井上浩氏、そして同社研究員でありプログラミング言語Rubyの作者として世界的に有名なまつもとゆきひろ氏にご講演いただきました。

まず田代氏から、「いまやソフトウェアは社会インフラであり、多様性を保ち、公正な競争や次世代の人材育成が行なわれることが必要である。そのため今後のIT社会を考える上で、OSSに基盤を置くことは一つの重要な解である。」と政策面から OSS の必要性について講演がありました。

次に井上氏が「大都市から離れている松江においては、時間と空間を飛び越える技術が必要」と、松江オープンソースラボの紹介を含めた島根県での OSS に対する期待の大きさを述べられた後、Rubyにより開発された Ruby on Rails (Web アプリケーションフレームワーク) の統合開発・運用環境「Rails Platform」を使って、その場で名刺管理システムを5分間で作り上げ、まつもと氏が「日本で一番早く Web アプリを作れる男」と評している実演に、会場から驚きの声が上がっていました。

そして最後に、世界的にも「Matz」として知られているまつもとゆきひろ氏が演台に立ち、自己紹介に始まって Ruby を作ったきっかけ、その特徴など作者ならではの貴重な講演に、参加者も興味深く聞き入っていました。子どもの頃から『言語』に興味を持っていたというまつもと氏は、「Rubyの真の目的は楽しむこと。見栄え=デザインも大切だし、プログラミング時の『ノリ』も大事にしたい。」と、自分の考えをシンプルにコンピュータに伝えるための言語としてRubyを開発したこと、そして「オープンソースであつたため、個人の発想の限界にとらわれることなく、コミュニティという集団で発想ができた。コンピュータの世界ではあるけれど、人と人との繋がりを大切にしてきたことがRuby発展の秘密」という言葉で、講演を締められました。

また引き続き行われた交流会では、Ruby爱好者たちが、人と人との繋がりが大切だったというまつもと氏の講演を実証するように、講師方が退出された後も議論に花を咲かせていました。



## 財団法人 京都高度技術研究所(ASTEM)との交流会

<平成18年11月14日>

財団法人京都高度技術研究所(ASTEM)は、1988年に京都経済界の発展、地域産業の振興、科学技術の進展に寄与することを目的に、京都府、京都市、京都商工会議所を中心とする地元産業界および京都大学を中心とする関西地区の大学によって設立された研究機関で、毎年 ISIT と定期的に研究交流を行っています。

今年度は ASTEM より池田所長をはじめ5名のスタッフの方々が ISIT に来訪され、産学連携による共同研究開発の事業化事例「SOBA プロジェクト」の紹介など活動状況についての報告がありました。

ISIT からは森光研究所次長による活動状況報告の後、ISIT の各研究室より、第1研究室 杉原研究員から「価格競争力に優れた高信頼性半導体デバイスの実現」、第2研究室 高橋研究員から「ユーザが信頼するプログラムによる個人情報保護に関する研究」、第3研究室 千田研究員から「ロボットが活躍する環境に向けた第3研究室の取り組み」の研究報告を行いました。

ASTEM と ISIT は、ともに地域の情報産業の振興と経済社会の発展に寄与することを目的としています。今回の交流会では産学連携コーディネート事業をはじめとして地域中小企業支援について積極的な意見交換を行いました。



# 第21回研究顧問会議

## 【研究顧問】(出席者 五十音順)

- ・有川 節夫 九州大学理事・副学長
- ・杉野 昇 日本大学大学院教授グローバル・ビジネス科 元教授
- ・長田 正 福岡市顧問(IT戦略担当)
- ・三井 信雄 イグナイト・グループ マネージング・パートナー

**牛島** 今日はお忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございました。ISITも昨年、おかげさまで満10周年を迎えることができました。そこでこの10年間の活動についていろいろデータを整理し、そのデータを深く分析することによって、私たちISITの新しい方向性を探ることができます。本日はそのようなご報告を中心に、顧問の先生方のご批判・ご提案をいただきたいと思います。



牛島 和夫 所長

**森光** 本日ご報告した資料は定量化が可能なものしか挙げていませんでした。定量化できない論文や特許などをあわせ、10年間の成果を数字にできるものとできないものに切り分けて整理し、ご報告したいと思います。

**三井** 成果を目で見える形で報告していくというのは簡単なことではないのはわかっています。しかし10年という節目なのですから、コンサルタントなど外部の方の意見も採り入れてきちんととした形で作成すべきだと思います。

**有川** 5年先10年先の中期経営計画のようなものを作成してはどうですか。

**三井** そのようなフレームがあって、年度ごとに継続した形で発表していくばわかりやすくなるのではないかと思います。

**有川** 福岡市は大学がたくさんあり、あえて市立大学を作る必要はありませんでしたが、研究開発に対して貢献すべきだという声が以前からありました。この研究所の成果がいろんなメディアで紹介されていますが、福岡市のイメージアップにお金では換算できない貢献をしていると思います。それをやっているからこそ、福岡市が補助金を出しているのだと思います。もっと成果をアピールして福岡市民が自慢できる研究所になって欲しいですね。



有川 節夫 氏

## 【ISITの活動について】

研究所次長：森光 武則



三井 信雄 氏

**三井** この10年間に福岡市から20数億円の補助金の配分を受けているが、その具体的な成果は何なのですか。実際にISITが儲ける必要はありませんが、共同開発した企業がそのプロジェクトにより収益を上げ、プロジェクト全体ではこれだけの成果が上がっているというような、ISITが使ったお金が生んだ先の成果をもつと知りたいですね。それを明らかにしていかないと研究所として長続きしないのではないかと思う。

**長田** ISITへの資金面での収入は金額的にはっきりしているが、アウトカムつまり成果を金額で見積もるとどうなるかをもっと知りたいと思います。

**三井** 今日発表していただいた資料だけをみて10年間の成果だと言わされたら、それは寂しいですね。お金にならないけれど非常に重要な特許をとったとか、学問的に意義のある論文を出したとか、そのようなものも成果として発表すべきではないですか。

**杉野** たとえば「ロボットタウン」というテーマの構想は、過去いろんなプロジェクトの積み重ねで生まれてきたプロジェクトだと思います。10年間の知的ストックを、目に見える形でまとめていただくと良いと思います。

## 【プロジェクトの推進】

～産学連携コーディネート事業について～

プロジェクト推進部 部長：内野 省一

**杉野** プロジェクト推進部では大学のシーズを企業に情報提供しているということですが、今やメーカーの研究部門や主要大学などは、良い研究がないかと常に探し回っています。わざわざISITが少しばかりの情報を提供したからといって、あまり意味はないと思います。大学がシーズを持っているけれど、リターンを得るまでが長すぎる等で企業の興味の目があまり届かないものに光を当てる、これは官が間に入らないと難しいでしょう。教育、福祉、まちづくりなど、民間では遠慮するけど役所としてはやった方がいいというテーマがどんどん増えてくると思います。たとえば病院のロボットタウン化などは、今ある技術を改良すればすぐ解決するのですが、民間はあまり手を出しません。しかし役所としては手を出すべきでしょう。そのようなテーマに絞って取り組むと、ISITの必要性が大きくなると思います。

**長田** 九州大学など主要大学は、有力な企業とは既に組織的な連携があります。ISITの産学連携コーディネータの活動は、中小企業にこそ必要だと思います。

**有川** 経済産業省が公募している資金では、大学とか研究所などに大企業ではなく中小企業とチームを組んで申請しないと指導しているものもあります。ISITがやらないと誰もやらないという事業にISITが加わることは地元貢献にも繋がってくると思います。



杉野 昇氏

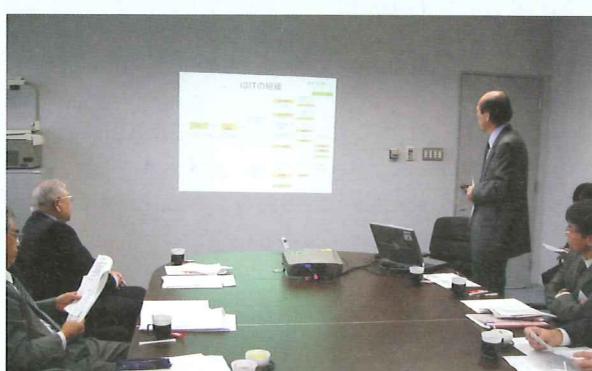
**杉野** 情報技術分野では、大企業は次から次に新しい技術を開発しています。一方中小企業では守り通してきた匠の技術がある。それらを結びつけることにより、お互いの企業だけでは思いもつかなかつたような製品を生み出すこともできるのではないかでしょうか。日本にはそのような匠の技術が蓄積されています。それを結びつけるような知恵を出すというのもISITの使命ではないでしょうか。

**三井** 中小企業はちょっとした開発をするにも資金に困っています。政府系の助成制度もあるけれど手続きが煩雑で、あまり効果が出ていません。中小企業の資金面を含めた振興策とISITの技術・指導力が結びつけば効果が出てきますね。

**森光** 中小企業向けの助成制度については、ISITも公募情報の提供や提案の助言などのサポートも行っています。中小企業も良い技術をたくさん持っているので、現実的にISITに望んでいるのは、最新の技術指導より、そういう事務的なサポートの方が多いですね。

**三井** 産学連携というと大企業に目が向かがちですが、地元中小企業のアイデアや技術を生かすために助成金や競争的資金を獲得してきたり、産学の事務的な窓口になるというのは、焦点もはっきりしているし、補助金を出している福岡市にとっても大変効果があることですよ。

**牛島** 昨年度よりISITに産学連携コーディネータが新設され、プロパー所員が一人増えました。これは福岡市に直接人員を配置するよりISITに配置した方が、地域に対して、より活動的な貢献ができるということで、予算をいただいたのだと思います。



## 【ロボットタウンについて～all-ISITプロジェクト～】

第3研究室 室長：木室 義彦

**木室** ISITは「システムLSI」「ネットワーク」「情報セキュリティ」「人に優しいインターフェース環境」等の幅広い要素技術を研究開発している優位性を活かして、これらの要素技術を集約するものとしてall-ISITプロジェクトを掲げ、第3研究室では、「ロボットタウン構想」を推進しています。

**長田** 今のロボット産業は市場が成熟しており、このままであまり伸びないでしょう。そこで次世代のロボットを考えた場合には人間との共生を含めて考える必要がありますが、ロボットの開発だけでは普及に限界があります。ロボットの周りや街中などの環境側にロボットとのインターフェースを整備することによって、ロボットが普及していく途があると思っています。福岡市は全国で初めてロボット特区に指定され、ロボットと福岡が結びついたイメージが全国的にできあがっているし、加えて人工島で新しい街づくりが行われており、実験しやすい環境が整っています。ロボットタウン構想が実現できれば、もっとアピールできるし、研究者が集まってくれると思います。



長田 正氏

**杉野** ロボットタウンというのは、要するにバリアフリーの街づくりにロボットを役立てようということですか。

**木室** ロボットタウン研究で培った情報コミュニケーション技術とロボット技術を活用してバリアフリーマップを作成し、障がい者・高齢者が安全に歩くことができるような街を実現したいと考えています。

**牛島** センサーやタグを活用した障がい者や高齢者が快適に生活できる街づくりというコンセプトをまずアピールした上で、それがロボットタウンに繋がると言ったほうが理解しやすいですね。

**三井** 先日、視覚障がいの方に、盲導犬は初めての場所には行けず、未知の世界に行くことが非常に制限されているという話を聞きました。ISITの研究がそのような方々のニーズに合うのであれば非常に有益であるし、福岡市のためにもなると思います。

**木室** 新しい技術や独創的な技術だけを追うのではなく、ユーザの方々が本当は何を望んでいるかを常に意識しながら、健常者にとっても生活が豊かになるようなシステムを考えて行きたいと思います。

**牛島** 長時間にわたり貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。本日いただきましたご意見、ご提案を今後の活動に生かしてまいりたいと思います。今後ともご支援・ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願ひいたします。

## 「IT業界における女性技術者・研究者の更なる活躍のために」

渡辺 善子氏 日本アイ・ビー・エム株式会社 常勤監査役

私が日本IBMに入社した当時は、男女雇用機会均等法が施行される前で、男性と女性の給料の格差などあって当たり前、女性がフルタイムで男性と同じように働くという環境ではありませんでした。就職活動をしていたとき、この会社だけが男性と女性の初任給が一緒でした。給料が一緒ということは、男性と同じような仕事をさせてもらえるのではないかと簡単に考え、この会社に入社しました。実は私が入社した時が、日本IBMで女性SEを養成する第一歩だったのですが、研修過程を修了したときに残っていた女性は結局私一人でした。最後の一人になったということは、私にとっては、そして会社にとっても今後の女性のキャリアを考える上で、大きな責任を負ったように思います。

SEとして企業に派遣され、第一線で働きつつ結婚・出産と年月を経てきましたが、そんな中ドイツの研究所に派遣される機会があり、そこで働く方々が仕事と生活の切れ目をはっきりさせて生活をエンジョイしているのを見た時にし、ワーク／ライフバランスの大切さを体験することができました。そして上級管理職になり、お客様の仕事がグローバル化するにつれて、私もアメリカに駐在するようになったのですが、日本では男性に負けないくらい活躍していたつもりでも、今考えるとだいぶ萎縮していたようです。外国では女性が言いたいことははつきり言って、しかも女性だからという反感は持たれません。ちゃんとした議論ができるのです。私も自分の意見を堂々と言えるようになりました。

1997年からIBMでは全世界的に女性の能力活用を経営課題の一つとして取り上げ、女性が能力を発揮するうえでの阻害要因を見出し、解決するための提言をしたり自ら活動するための機関としてウィメンズ・カウンシルの設置を行いました。私も帰国後、JWC（ジャパンウィメンズカウンシル）の立ち上げに参加し、女性のために活動するようになつたのです。

企業が優秀な女性を採用し、女性採用率を上げることもJWCの活動の一つです。女性に入社前、大学入学前から将来会社に入ってこういう活動をしたい、活躍したいという意識を持ってほしいという想いがあつたので、女子学生向けのセミナーや仕事に対する啓発活動を行ってきました。また日本IBMでは、女子中高生が様々な観点から面白く科学が理解できるよう、2001年より毎夏『夏休み女子中高生向け科学セミナー』を行っています。

さて女性社員にとって、育児・介護と仕事とのワーク／ライフバランスは、非常に重要な問題ですし、経営側も世界の共通課題として認識しています。「働きやすい会社」アンケートの結果をみても、男性を含めて仕事と個人生活の両立が非常に重要な人が多くなりました。「ワーク／ライフバランスが取れている会社」が「働きやすい会社」として学生に選ばれる会社になってくるでしょう。優秀な人材を確保するためには、社員のワーク／ライフバランスを考える必要があります。日本IBMでは多様な働き方を模索した中で、ブロードバンド環境を利用したe-ワーク制度やモバイルオフィス制度など、社員を時間と空間の制約から解放するためのワーク／ライフマネジメントを行っています。

会社にとって何が重要な経営資産でしょうか。それは”人”だと考えます。会社にとって、男性社員でも女性社員でも十二分にその能力を發揮してもらうことは、一番大事なことでしょう。多くの職場環境では女性の能力を十分に発揮できているとは思えません。「女性だからどうかな」と思う前に、まずやらせてみてください。一人でも成功体験が出てくると、二人目の女性を起用するのに抵抗がなくなってきます。社員すべてに同じように働いてもらうのが良いに決まっています。業務が複雑多岐になってきた今日、「部長－課長－社員」といった従来の体制ではなく、複数の上司と専門家集団が、案件によってチームを組むプロジェクト型の業務遂行が適していると思います。そこでは男性・女性よりもプロフェッショナルな個の能力が必要なっています。

若者、そして女性が未来に輝く条件として「継続」「プロフェッショナル」「自分らしく」という言葉を挙げたいと思います。まず一番にならなくても良いから、継続すること。そしてただ続けるのではなく、これだけは誰にも負けないというプロフェッショナルな技術を身につけること。最後にこれが女性にとっては一番難しいのですが、自分を出すこと。最初から遠慮して考えるのではなく、「どうしたらそれができるか」とポジティブに考え、自分を出してください。応援してくれる人が出てくるはずです。そのように「自分らしい」人が多ければ多いほど、自分を出せる人が多くなってきます。そうすれば未来は輝くと思います。



**檀上 英利氏 凸版印刷株式会社 機能性部材事業推進部 課長**

電子ペーパーとは、電子ディスプレイの動的に書き換える性質と紙の読みやすさを合わせ持つ次世代の表示媒体で、いわば紙とディスプレイの「良い所取り」を目指す "Paper-Like Display" です。電子ペーパーに求められる機能としては、①印刷物レベルの見やすさ ②書き換え可能 ③画像の維持にエネルギーが不要 ④持ち運べるなどが挙げられますが、その機能を追求するためにさまざまな表示技術が研究されています。

わが社では現在、アメリカの E-Ink 社と共に電子ペーパーの事業化に取り組んでいます。E-Ink 技術は「マイクロカプセル型電気泳動方式」といい、基材面にコーティングされた透明なマイクロカプセルの中に、帶電した白と黒の顔料粒子があり、電圧を掛けて粒子を移動させることで表示する技術です。その技術の特徴は紙のように見やすく、超低消費電力で、軽量であるということを可能にします。とくに見やすさに関しては、紙と同様に照明角や視野角に依存しないので、90 分くらいの時間までは紙の本と視覚疲労感がほとんど変わらないと言われています。

では今後どうすればもっと電子ペーパーを普及させていくのかが最大の課題です。それには安く、安定して作る量産技術や、特性を活かして別の用途に使う用途展開、性能を改善して用途を広げる次世代の技術開発が重要です。現在はそれらを踏まえたところで、電子看板や時計の表示機能、また電子書籍端末などで商品化と普及が進められています。そして将来的には新聞や広告、雑誌などさまざまな生活シーンで活躍するものと考えます。このように電子ペーパーの本格的な商用化は目の前にきており、PC やケータイ、TV などとはまったく違う、今後のユビキタス社会を担う新しい商品のマーケットの創出が期待できます。



&lt;平成18年12月20日&gt;

**「PSIシンポジウム2006」村上第1研究室長主導にて開催**

昨年に続き、平成18年12月20日に明治安田生命ビル MY PLAZA ホール(東京都千代田区)にて、村上和彰 ISIT 第1 研究室長(九州大学情報基盤センター センター長)がプロジェクトリーダーを務める PSI プロジェクトのシンポジウムが、定員を超える参加者のもと、開催されました。

PSI プロジェクトとは、文部科学省が公募した「次世代 IT 基盤構築のための研究開発」の研究開発領域「将来のスーパーコンピューティングのための要素技術の研究開発」に採択された研究開発課題「ペタスケール・システムインターネット技術の開発」に関するプロジェクトで、平成17年度より3ヵ年計画で九州大学、富士通、ふくおか IST、ISIT の4機関が共同して推進しています。

今回のシンポジウムはプロジェクトの中間点ということもあり、現時点での研究開発の進捗報告が中心でしたが、着実に成果が上がっているとの評価が各方面よりあり、またプロジェクト完遂に向けた期待のこもった講演もありました。なかでも文部科学省より、産学官の連携がうまくとれた理想的な形でプロジェクトが進んでいるとの賛辞が贈られました。

村上第1研究室長は閉会にあたり、「当プロジェクトは3年間で終了するが、その後も次世代、次々世代に向けた研究開発を続けていきたい」との言葉で、シンポジウムを締めました。



&lt;平成18年11月6日&gt;

**韓国 成均館大学校との研究協定に関する覚書締結**

ISIT では韓国の成均館大学校 情報保護認証技術研究センター (ATRC) と情報セキュリティ分野での研究協定の覚書 (MOU) を締結しました。海外研究機関との MOU 締結はこれで4件目となります。調印については平成18年11月6日に櫻井幸一 ISIT 第2研究室長 (九州大学大学院教授) が韓国水原市の成均館大学校に赴き、ATRC のセンター長である元東豪 (ウォン・ドンホ) 教授との間でとりおこなわれました。この MOU は「情報交換」「共同セミナー」「国際共同研究」等が主な活動内容となっています。

成均館大学校は600年を超える歴史を持つ名門私立大学で、ソウルキャンパスには文系と芸能・体育系の学部が、水原キャンパスには理系の学部がそれぞれあります。水原キャンパスの情報通信工学部では、半導体システム科のようにサムスン電子からの寄付学科を受け入れ、同社からの講師を招くなど産業界との結びつきが強いことでも知られています。



情報セキュリティについては、暗号化アルゴリズム、電子署名技術などの基礎分野から、ネットワークのセキュリティ技術のような応用までその研究の幅が広く、また国際標準化活動が活発なこともあります、国際的に連携して研究を進めていくことが不可欠です。この観点から、ISIT では情報セキュリティ技術の日中韓共同研究プロジェクト (本年度、独立行政法人情報通信研究機構の国際共同研究助成事業として採択) の中核機関として共同研究を推進してきました。今回の MOU 締結を通じて、このプロジェクトをはじめ、韓国やその他アジアの研究機関との研究交流をさらに推進してまいります。

# JETプログラム研究員をISITに受入

ISITでは、福岡市のJETプログラムに係わる交流研究員として、インド科学大学院大学よりPradeep H.Rao氏を第1研究室 村上室長の下に受け入れました。JETプログラムは外国语教育の充実を図るとともに、地域レベルでの国際交流の推進を目的として外国青年を招致する事業であり、今回のプログラムにより、インドとの相互理解の増進と、福岡市の国際化の促進が期待されています。

## Pradeep H.Rao 氏 紹介

(日本語訳：事業部 田中久央)

Hello/Konni-chiwa, my name is Pradeep H.Rao. I'm a third year doctoral student at the Supercomputer Education and Research Centre at the Indian Institute of Science, Bangalore, India. My research interests are in the areas of computer architecture and performance modeling. For my doctoral dissertation I'm studying the performance aspects of the Java Virtual Machine. I'm at Laboratory-1, ISIT as a visiting researcher under the Japan Exchange and Teaching (JET) Programme. While at ISIT, I'd be continuing on my doctoral dissertation initiated while at India.



(こんにちは。プラディープ・H・ラオと申します。私はインドのバンガロール市にあるインド科学大学院大学CAD研究部スーパーコンピュータ学科博士課程の3年生です。そこでの研究はコンピュータ設計とそのパフォーマンスマネジメントモデルの分野です。私の博士論文に関して言えば、Java Virtual Machineのパフォーマンス面の研究をしているところです。私は現在、JETプログラムのもと、交流研究員としてISITの第1研究室に所属しています。ISITにいる間は当面、インドではじめた博士論文のための研究を続けていきます。)

The JET programme also allows me to be introduced to Japanese culture and the Japanese way of life. There is no better way to do this than to spend time here. My hobbies include traveling, playing badminton, reading and watching movies. I have recently started on Japanese Language classes at the Momochihama kominkan and in the coming months I hope to have learnt enough Japanese to be able to communicate in Japanese and hopefully also watch Japanese Movies.

(JETプログラムのおかげで、日本の文化や生活習慣に触れることができます。また日本で過ごすことがこの国の文化や習慣を理解するうえで、一番の近道ではないかと思います。個人的な趣味といえば、旅行やバドミントン、読書や映画鑑賞ですが、最近では百道浜公民館で日本語教室にも通いはじめました。数ヵ月後には、日本語での会話もできるようになり、邦画なども観られるようになりたいと思います。)

In the past month I have visited the Dazaifu shrine and Tochoji temple at Gion. I also like spending time at Tenjin as it offers a truly cosmopolitan experience. I have taken a liking to this place as the Japanese culture and customs are very similar to what we have at India. Thanks to the several welcome parties hosted for me, I have also been exposed Japanese food and drink, and I must admit that I'm particularly fond of shochu. In the coming months I plan to dine the yatai stalls at Fukuoka and perhaps visit Nakasus, Nagasaki and Tokyo. Anyone else interested?

(また先月、大宰府天満宮や祇園の東長寺に行きました。また都会的な雰囲気を味わえる天神地区で過ごすのも好きです。日本の文化や習慣はインドのそれとてもよく似ていますが、そういう意味では自分は日本とつながっていたんだなと感じます。日本にきてたくさんの歓迎会をしていただきましたが、そこで日本食や日本のお酒をいただき、その中でも特に自分は焼酎が“お気に入り”になりました。そんなことでゆくゆくは福岡の屋台や中洲、長崎や東京なども行ってみようと思っています。一緒にどうですか?)

## Welcome ご来訪の皆様 (敬称略)

貴重な情報交換、誠にありがとうございました。

平成18年10月以降の主なご来訪者[一覧]

10/5	経済産業省 商務情報政策局	3名
	独立行政法人 情報処理推進機構	
11/15	経済産業省 産業技術環境局	1名
	有限会社環境ジーアイエス研究所	1名
11/29	横須賀市	2名
	愛知県立古知野高等学校	2名
12/6	日立電子サービス株式会社	4名

ISITメールマガジンでは、ISIT主催の定期交流会や各種セミナーの情報、定期発行のお知らせ、現在公募中の情報など配信しております。  
<http://www.isit.or.jp/magazine/form.html>よりお申し込みいただけます。

### ■発行■

財団法人 九州システム情報技術研究所 ISIT

Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

〒814-0001

福岡市早良区百道浜2丁目1-22-707(福岡SRPセンタービル(ももちキューブ)7F)  
Fukuoka City 814-0001

TEL 092-852-3450 FAX 092-852-3455

URL:<http://www.isit.or.jp> E-mail:koryu@isit.or.jp

制作:株式会社 ドミックスコーポレーション

